

親切とお節介は紙一重

あかね助産院院長 奥田朱美

「お節介」という言葉を辞書で引くと、「いらぬお世話、口出し、差し出口、干渉」とあります。また、「かえって迷惑になることをすること」ともあります。

私は、お節介という言葉を知ると、「いらぬお節介」を真っ先に連想します。

たとえば、出産予定日を過ぎた産婦さんに、「まだ生まれないの？」とメールで尋ねる。産婦さんにしてみれば、生まれるように一生懸命に努力し

ても、自分の力だけではどうすることもできないことを実感しているときに「まだ？」と聞かれるのは、プレッシャーを感じてしまうのです。メールを送るほうにしてみれば、心配でもあり、軽い気持ちで「まだですか？」と尋ねているだけなのですが、一番不安になっている産婦さん本人にしてみれば、「いらぬお節介」になってしまっているのです。しかし、同じように予定日が過ぎた産婦さん同士の「まだですか？」のメールには、お互いに慰



め合うため、励まし合って頑張ることができるとです。

また、小さなお子さんを連れのお母さんによく寄せられる「二人目はまだなの？」という質問も、「いらぬお節介」となる場合があります。不妊症などで望んでいてもできない人や、経済的にもうこれ以上はと思っている人、あるいは当人たちの間で相談して、「子供は一人だけでいい」と考えているのかもしれない。

しかし、現時点で「いらぬお節介」と思っている人も、妊娠不可能な時期になって「もう一人、子供がいれば良かった」と思うことがあるかもしれません。若いときは「いらぬお節介」としか思えなかった「二人目はまだなの？」という質問が、年をとると、自分たちのことを考えて発せられたものであったことに気づく場合もあるのです。

また、お産の手伝いのため、当院に来てくれるスタッフが、先を予測してあれこれ行動してくれるのですが、ときにはそれが余計な手間を作

ってしまうこともあり、「どうしてこんなことをしてしまったの」と思うこともあります。彼女は良かれと思ってやってくれたことでも、私と意思の疎通がうまくできていかなかったために、お節介になってしまうのです。意思の疎通ができていければ、これは大助かりだと思うのです。

先日、ある新聞で「サルはお節介をしない」という記事を目にしました。檻の中から、手の届かない場所にあるバナナを取ろうとしているサルがいると、ほかのサルが、棒などでバナナを押しして手伝う。しかし、バナナに見向きもしていないサルに、無理にバナナを渡そうとすることはしないのだそうです。

「いらぬお節介」ではなく、相手にとって喜ばしい「親切」とするためには、相手の気持ちや置かれた立場、周囲の環境など、いろんなことを考慮しなくてははいけません。まさに、親切とお節介は紙一重なのです。

私も、自分の息子に対しては、「いらぬお節介」

を、ついやってしまうことがあります。

長い手紙を書いたり、息子のためになるからと思つて取つておいた本や、息子の仕事と関係のある新聞記事の切り抜きを送つたりすると、息子は「ゴミを送らないでくれ。東京はゴミを出すのも大変なんだ」と言つてきます。また、ときには差し入れのつもりでお菓子やカップ麺などを送るのですが、「こんなものはどこでも買えるし、大量に送つてきても食べきれない」と文句を言つてきます。親からすれば、息子はいつまでも子供なのですが、息子としては、大人なのだとアピールするのです。

また、母親としてはどうしても気になるので、「お嫁さんはまだなの？ いい子がいたら早く知らせてね」と聞くのですが、これも息子にとって「いらぬお節介」となつてしまいます。息子のための思つてやっていることですが、なかなか親の気持ちは受け取ってもらえません。息子が将来親になつて、同じような状況になつたとき、初め

て理解できることなのでしょう。

私は耳の手術を受けたことがあります。全身麻酔で、次の日はジェットコースターに乗っているように気分が悪く、誰とも会いたくないと思つていたときに、教会の会長さんが来られて、「おさづけをさせてもらつてもいいですか」と言われるのです。会長さんの気持ちはよくわかるので、「お願いします」と言つて取り次いで貰つたのですが、実はあまり気が進みませんでした。

理由は、気分の悪いときに加え、主人以外の男性であるということでした。パジャマを着た私のやつれた姿を見られるのが凄く嫌だった。だから「誰も面会には来ないで」と言つて、会長さんにも話していたのですが、毎日来られるのです。ついに「やめて欲しい」と伝えて、私が退院してかいらにしてもらいました。患者になつた人にも事情があり、考えがあるのです。それを汲み取つてこそ快く受け取ってもらえるのではないでしょうか？ 言い換えれば、私の成人がまだまだ足りない

いということでもありません。

親神様は、私たちにたくさんの親心をかけてくださっています。それは、見方によればお節介に見えるときもあります。特に信仰を持っていない人にとってはお節介に映るでしょう。しかし、信仰を持っている人にとっては、それは親心だと深く感じ感謝できるのだと思います。



信仰を持っていない人にかにお節介ではなく、親心かを伝えるのは至難なことでしょう。それを乗り越えるために

は、コミュニケーションが良くできていてだけでも、信頼関係があるだけでも、思想が同じでも、価値観が同じでも、難しいものです。

そこは「親心」という言葉でしょうね。

その親心は、ときに優しく心地よいものだったり、ときには身上や事情のふしとして、厳しいお仕込みをくださることもあります。ふしの真つただ中では、親神様の思召を理解できず、喜べなくて心を倒しそうになることもあります。しかし、いつか、思召を理解できる時が来たとき、初めてお節介ではなく、感謝される親切になるのだと思います。

身体的、精神的なつらさなど、さまざまな悩みを抱える人に対して、親心を持って自分のできる範囲で少しでもたすけの手を差し伸べる。そうしたことが自然とできるようになっていくことで、相手からも感謝される、本当の親切ができるようになるのではないのでしょうか。

(おくだ あけみ)